新学習指導要領に照らして見る教科書の内容解説

1 〔共通事項〕

ここが特長！

●さまざまな活動を通して、あらゆる場面で〔共通事項〕が繰り返し学習できます。

▼

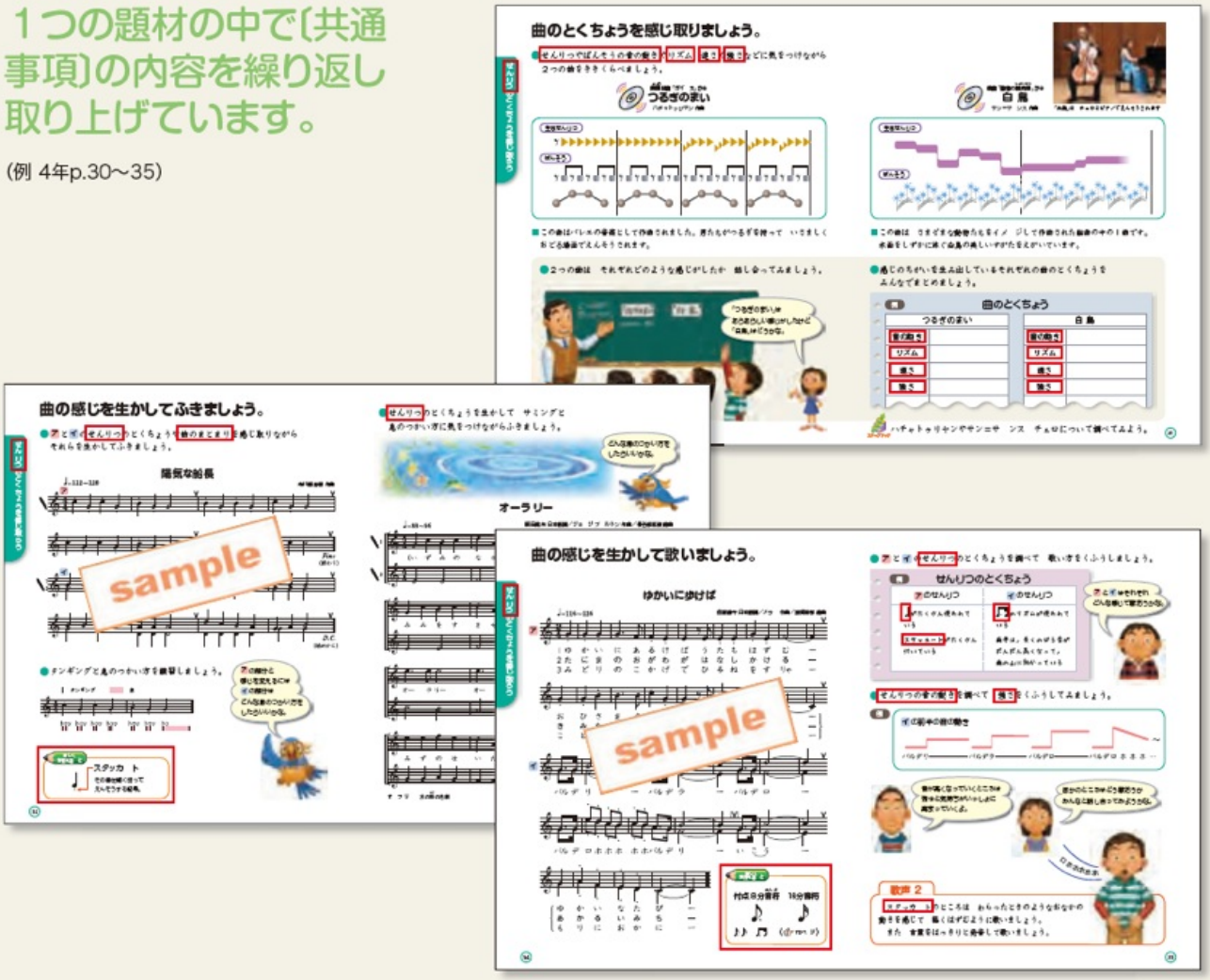
〔共通事項〕に示された内容だけを取り出してしまう学習にならないよう、考慮しています。

子どもたちの力を育てます

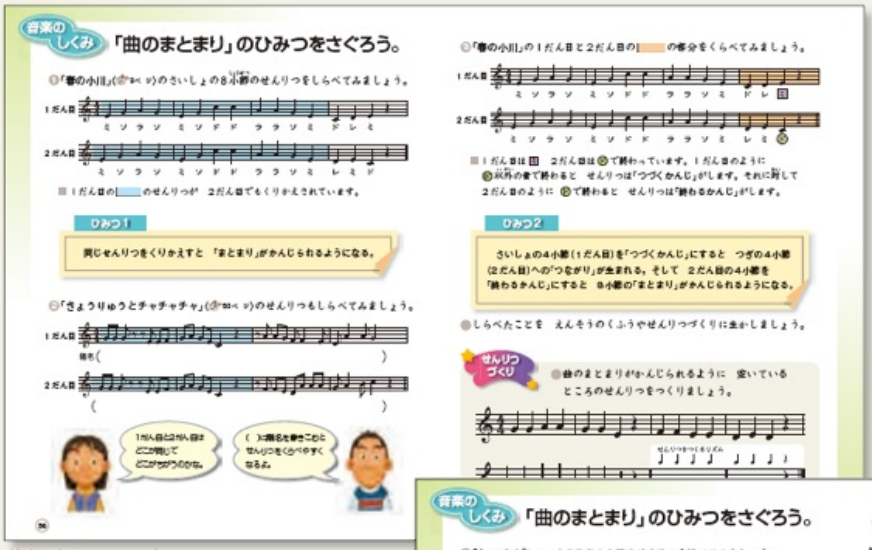
●旋律、リズム、速度、強弱、音楽の仕組み、音符、記号などをさまざまな活動を通して学習します。

１つの題材の中で〔共通事項〕の内容を繰り返し取り上げています。

(例 4年p.30〜35)



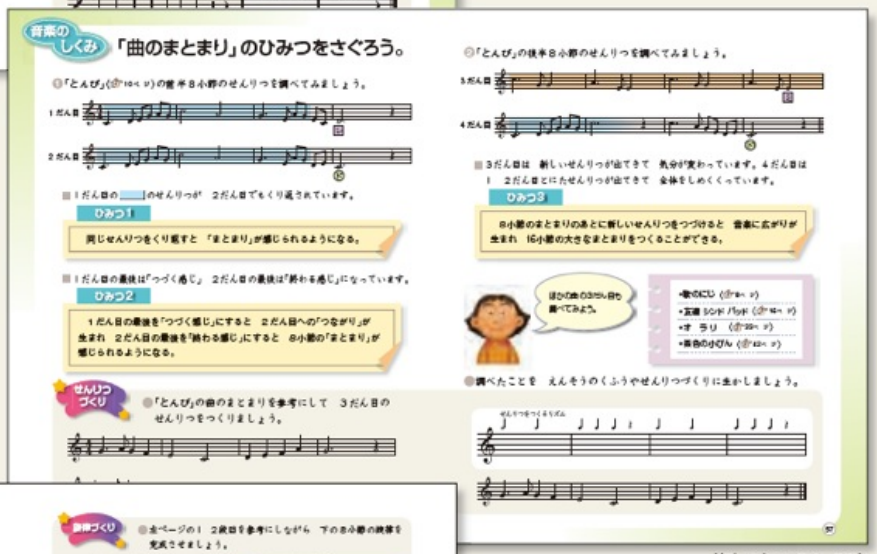
巻末の「音楽のしくみ」のページでは、本文の教材とリンクしながら〔共通事項〕についてより深く学習を進めることができます。



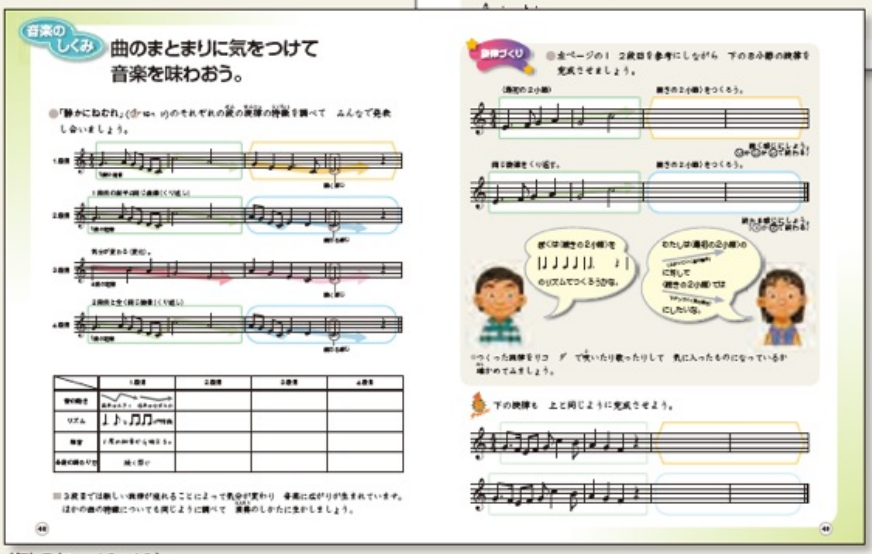
(例 3年p.56・57)

「音楽のしくみ」で学習したことをそのまま「旋律づくり」に生かします。

➡ 本紙p.9「音楽づくり」の内容とも関連



(例 4年p.56・57)



(例 5年p.48・49)

☆「発展的な学習内容」の扱い

学習指導要領に示されていない内容は「ステップアップ」として、学習指導要領の範囲で学習をより深めたいときの一歩進んだ活動は「チャレンジ!」として提示しています。

ステップアップ

チャレンジ!

新学習指導要領に照らして見る教科書の内容解説

② 音楽づくり

ここが特長！

- “これならできる”という内容や活動例で確実に学習に取り組むことができます。
- 「音遊び」や「音楽づくり」を系統的に取り上げています。

▼

だれもができる「音楽づくり」。

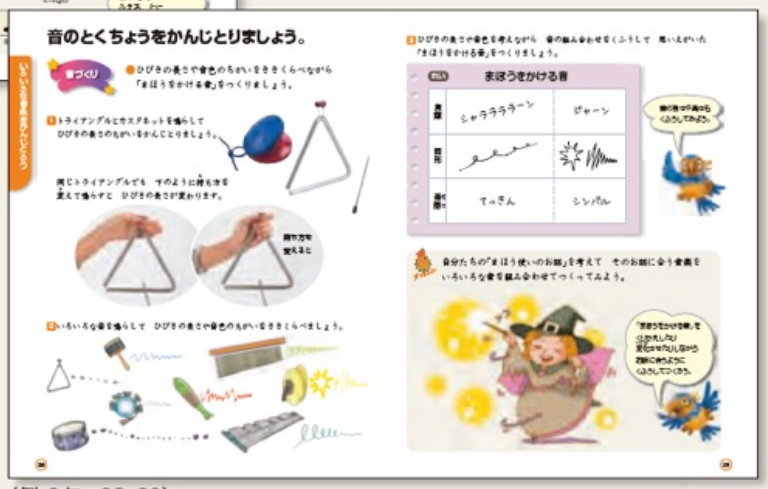
子どもたちの力を育てます

- さまざまな発想をもって音遊びをしたり即興的に表現したりすること。
- 音を音楽へと構成していくこと。

「音遊び」、「音さがし」、「音づくり」の例

（例 1年p.36・37）

（例 2年p.32・33）

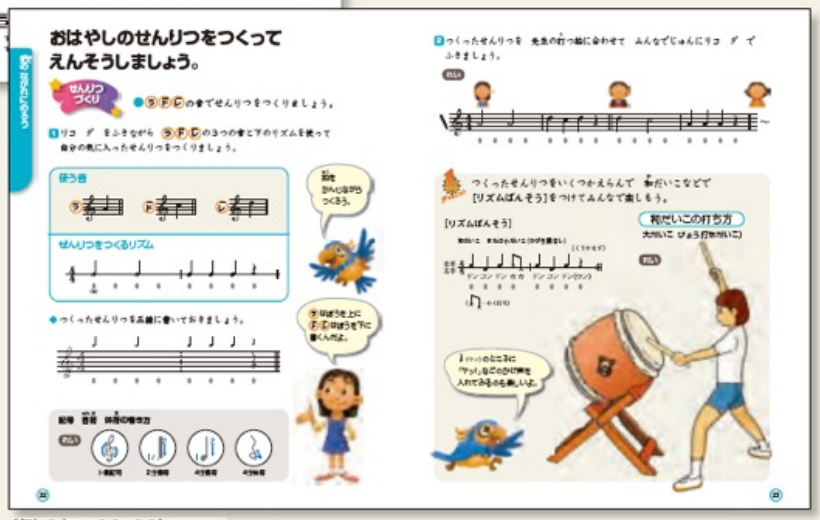


（例 3年p.28・29）

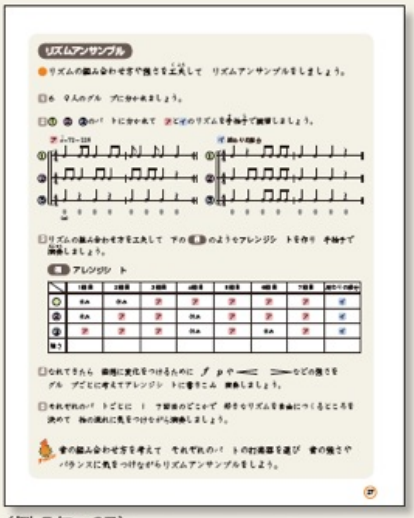
音のおもしろさに気付き、さまざまな発想をもって音を音楽へと構成していきます。

(例 2年p.20･21)

手順が丁寧に示されているので、だれもが楽しみながら学習することができます。



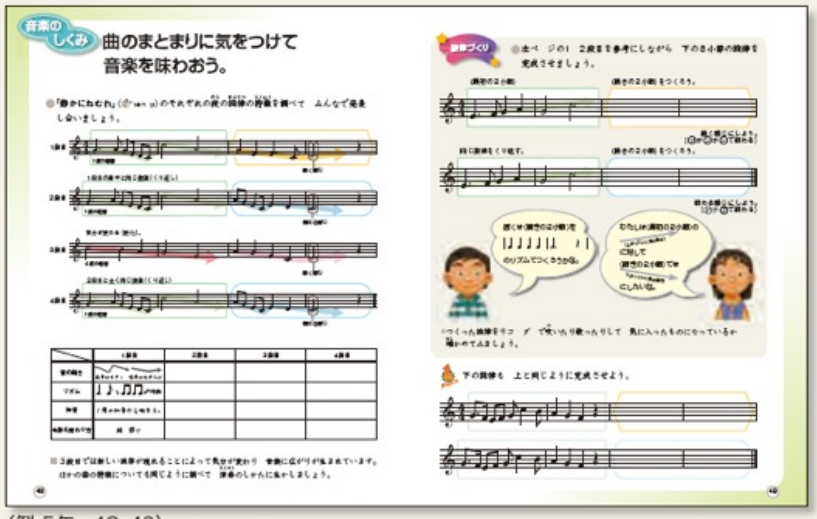
(例 3年p.22･23)



(例 5年p.27)

即興表現を工夫して、自分たちの「リズムアンサンブル」を楽しみます。

「旋律づくり」を段階的に



(例 5年p.48･49)

3年以上の巻末では「音楽のしくみ」の特集ページを設けて「旋律づくり」を段階的に経験し、中学校の「創作」へとつなげます。

本紙p.13〔共通事項〕の内容と関連

新学習指導要領に照らして見る教科書の内容解説

3 鑑賞

ここが特長！

●教材性を見直し、楽曲を一新しています。

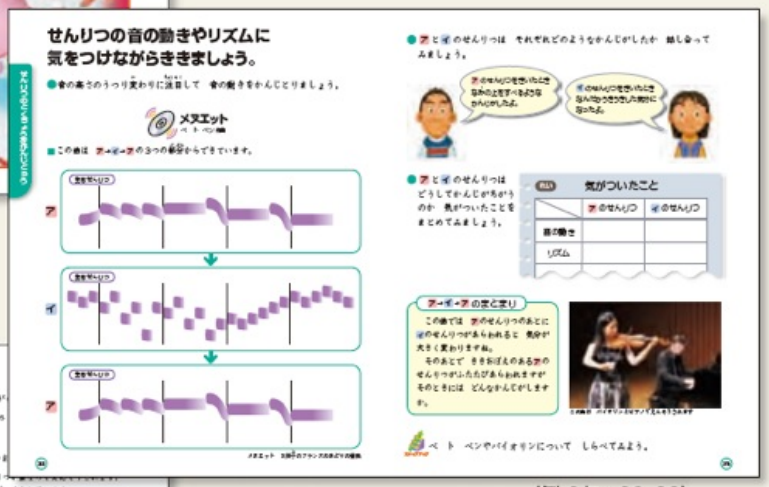
鑑賞活動の手がかりとなる情報を多く例示。

子どもたちの力を育てます

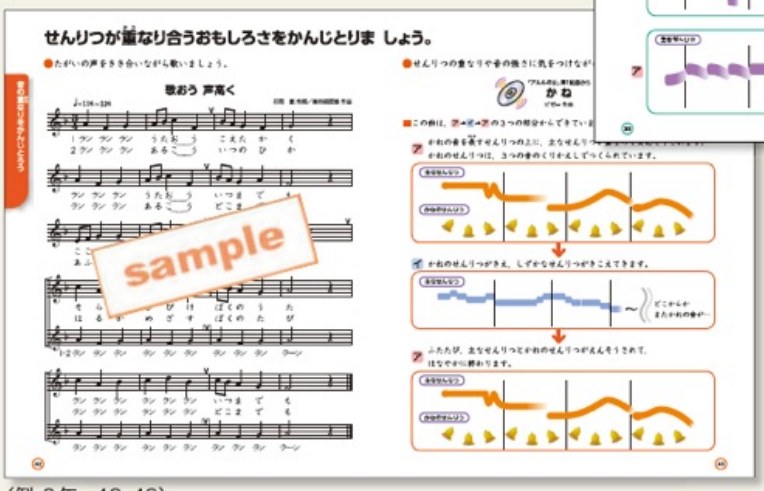
●曲想を感じ取ること、言葉で伝えること。
●楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。
●〔共通事項〕に示されている内容を聴き取ること。

(例 2年p.38・39)

イラストや絵譜などが感覚的に曲を捉えることの一助となります。



(例 3年p.32・33)

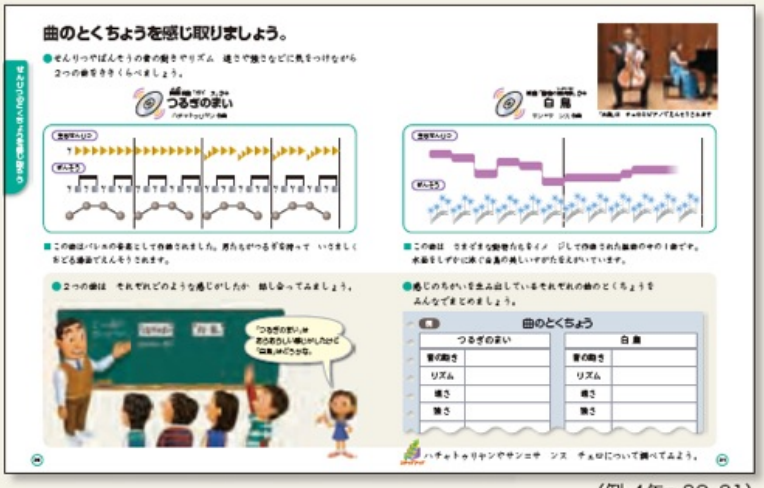


(例 3年p.42・43)

鑑賞と表現を密接に関連させることにより、学習内容を深めることができます。

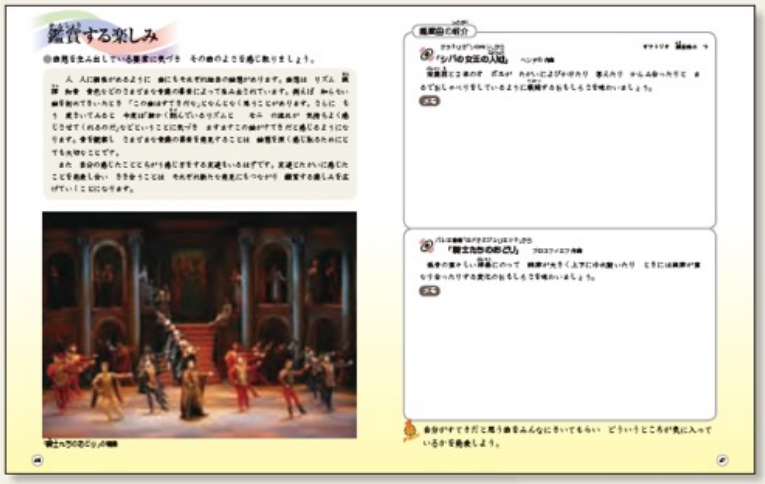
比較鑑賞をすることで
それぞれの音楽の
違いや特徴をより明確に
感じ取ることができます。

本紙p.6〔共通事項〕の
内容と関連



(例 4年p.30・31)

(例 6年p.46・47)



感じ取ったことを互いに
発表し合ったり
意見を交換したりして
鑑賞を楽しみます。

(例 1年p.58・59)

音楽を全体にわたって捉える
ことを意図して鑑賞します。

(例 4年p.52・53)

新学習指導要領に照らして見る教科書の内容解説

4 日本の伝統音楽

ここが特長！

- 1，2年：わらべ歌。
- 3年：お囃子。4年：民謡とことの音楽。
- 5年：ことと尺八による音楽。ことに親しもう。
- 6年：雅楽と日本の楽器。

★共通教材は題材にとらわれず、「こころのうた」として統一した示し方をしています。

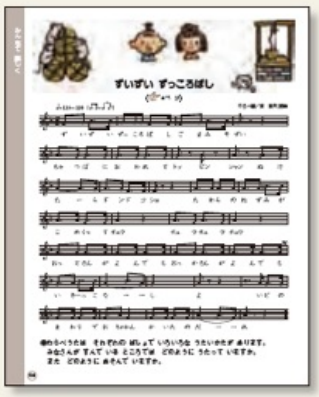
▼

さまざまな音楽を通して、我が国の文化の一端に触れられるようにしています。

子どもたちの力を育てます　●我が国の伝統と文化を受け継いで発展させていくこと。

低学年　わらべ歌を身体活動とともに

（例 1年p.16・17）



（例 2年p.64）

3年　お囃子・郷土の音楽

（例 3年p.48・49）

（例 3年p.68・69）

4年 和楽器の鑑賞

(例 4年p.48･49)

4年 日本の民謡・郷土の民謡

(例 4年p.44･45)

(例 4年p.68･69)

5, 6年 和楽器に親しむために

(例 5年p.66･67)

(例 6年p.66･67)

「世界の国々の音楽」(6年p.38･39)とリンクします。

教科書の内容解説

5 低学年

ここが特長！

- 音楽の学習の第一歩として「拍」と「リズム」の学習を段階的に継続して進めていきます。
- ハンドサインを用いながら、階名唱を進めていきます。

▼

「拍」や「音程感」の基礎・基本が確実に身につきます。

(例 1年p.10・11)

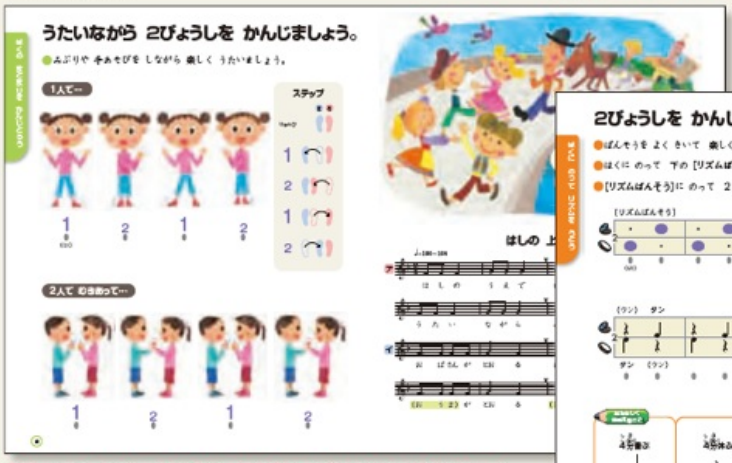
拍とリズム：1年

(例 1年p.14・15)

拍を感じて…

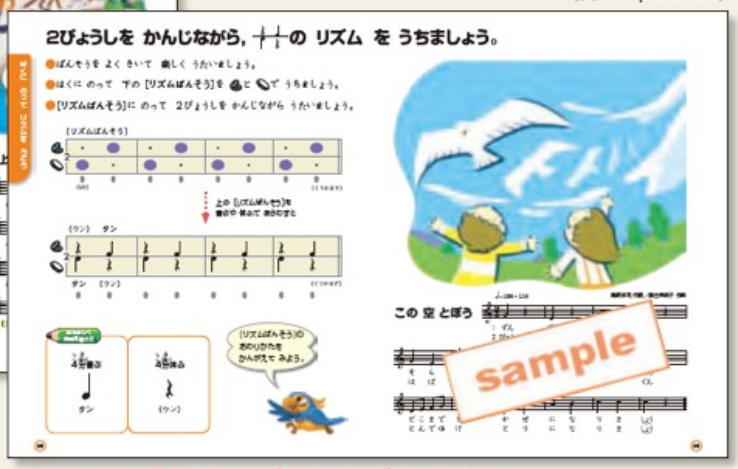
拍にのってリズム打ち…

(例 2年p.8・9)



拍とリズム：2年

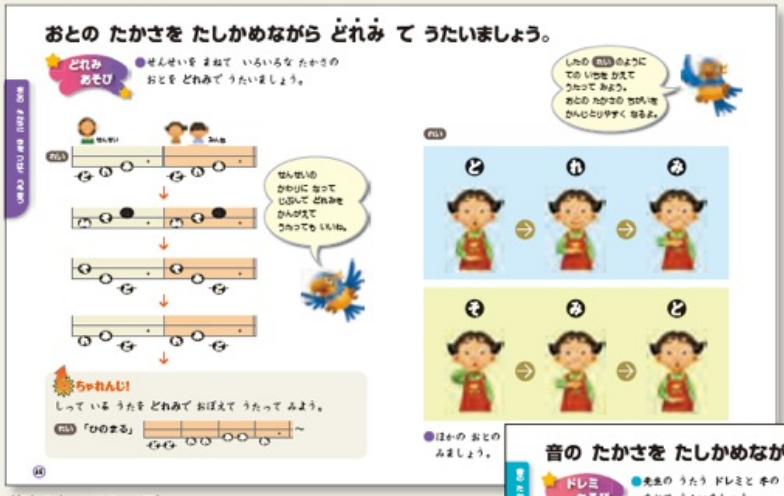
(例 2年p.22・23)



拍のまとまり（拍子）を感じて…

拍子を感じながらリズム打ち…

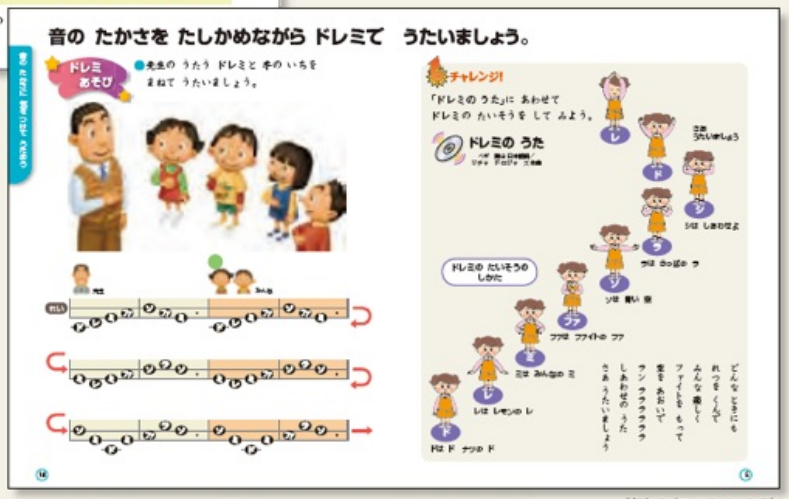
階名唱の活動例



(例 1年p.46・47)

音程感を確実に
身につけるために、
ハンドサインを用いながら
目と体で音の高さを
実感します。

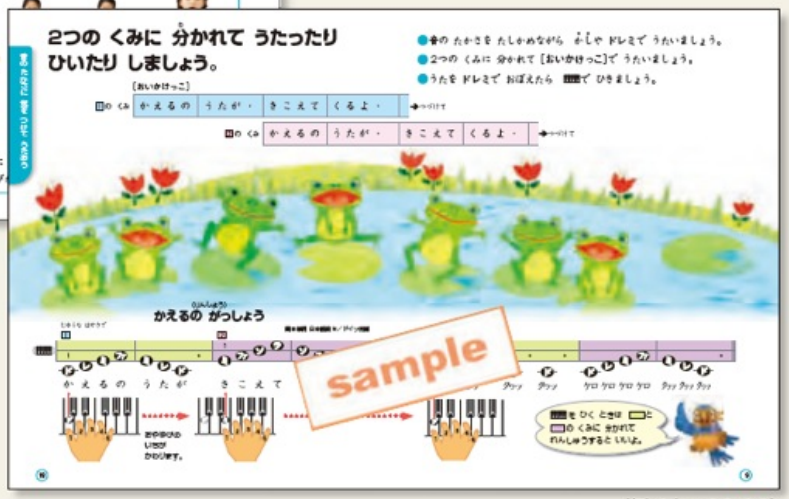
ハンドサインの
発展として
ドレミの体操を
掲載しています。



(例 2年p.14・15)

(例 2年p.16・17)

旋律を階名で歌って、
音程感を養います。



(例 2年p.18・19)

階名暗唱してから
鍵盤楽器で演奏します。

教科書の内容解説

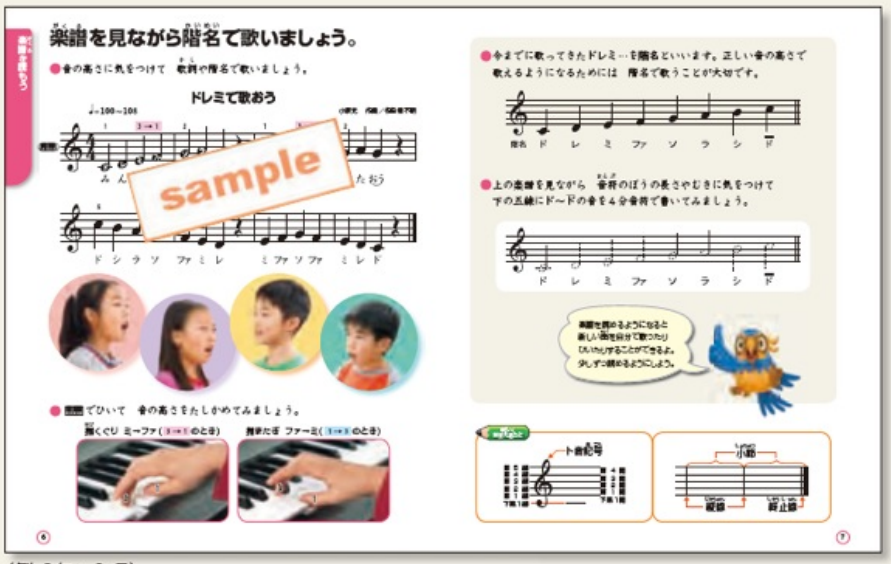
6 中学年

ここが特長！

- 「階名視唱・視奏」を繰り返し学習します。
- 旋律の特徴を探ったり調べたりする学習活動をします。

▼

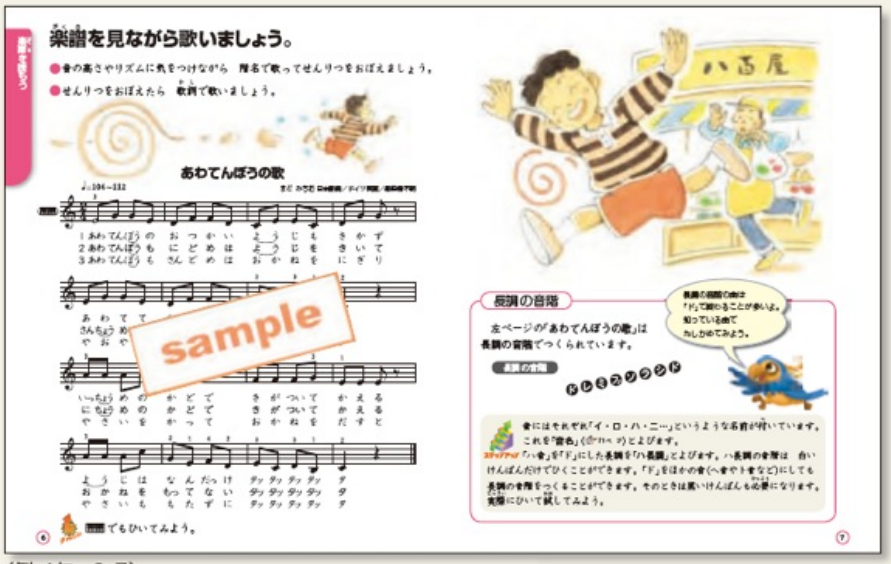
「読譜力」を確実に身につけるとともに、
表現や鑑賞に生かしていきます。



(例 3年p.6･7)

階名や音符を繰り返し
書くことによって、
読譜力を育成します。

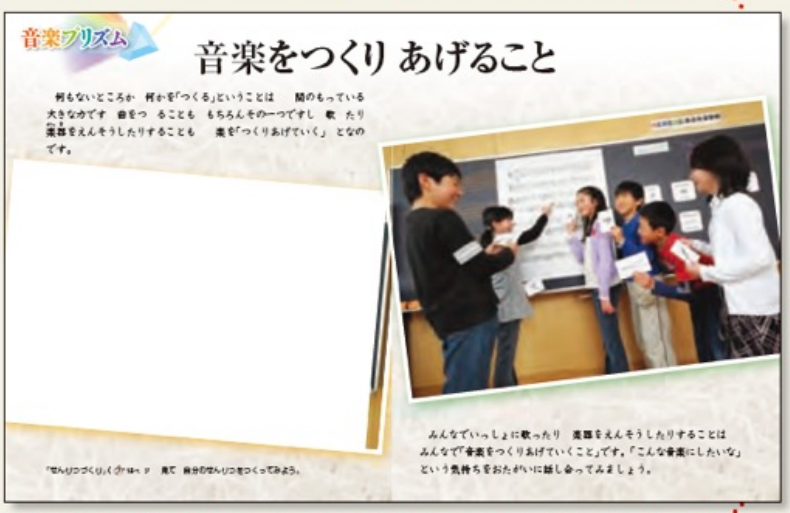
学年当初の題材は、
楽譜に慣れ親しむ
ことから始まります。



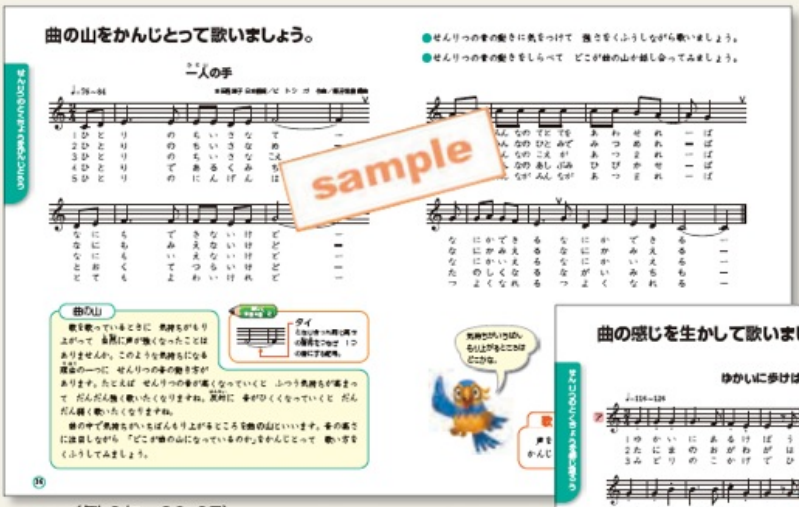
(例 4年p.6･7)

音楽プリズムの例

さまざまな
コミュニケーションを通して、
言語に関する能力を
高めるとともに、
みんなで「音楽をつくり
上げていくこと」の大切さに
気付くようにします。

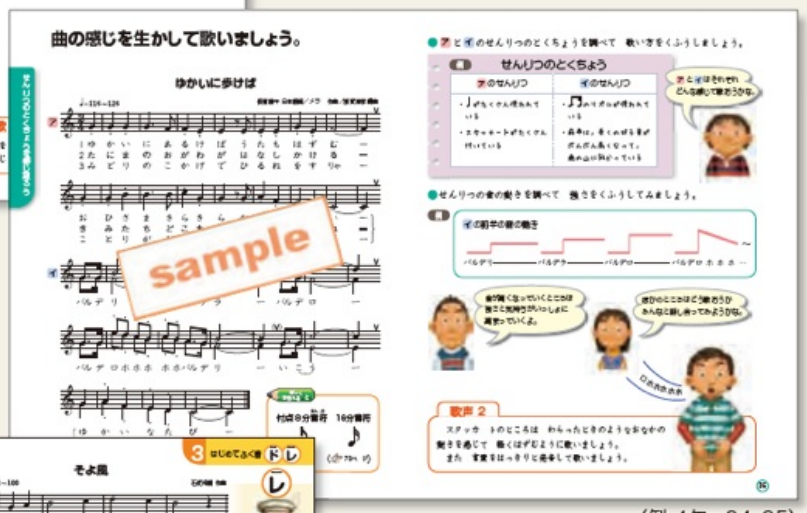


（例 4年口絵）

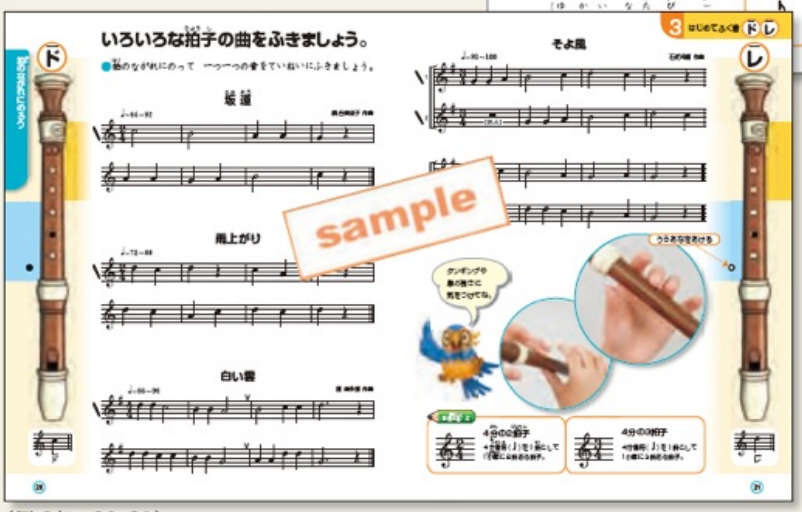


旋律の特徴や音の動き
（旋律線）を調べて、
曲想にふさわしい
表現の仕方を工夫します。

（例 3年p.36・37）



（例 4年p.34・35）



リコーダーの短い曲にも
タイトルがつけられており、
思いや意図を表現に
生かすための手がかりや
ヒントとなります。

（例 3年p.20・21）

教科書の内容解説

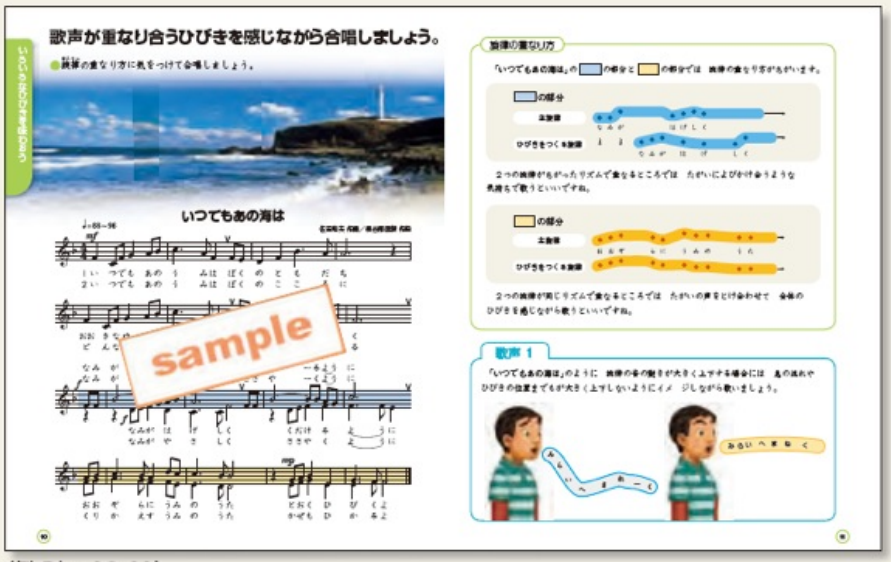
7 高学年

ここが特長！

- 「音の重なり」や「和声の響き」を感じ取り、楽しみながら学習することができるよう魅力的な教材を配置しました。
- 言葉への意識を高めるような活動を豊富に掲載しています。

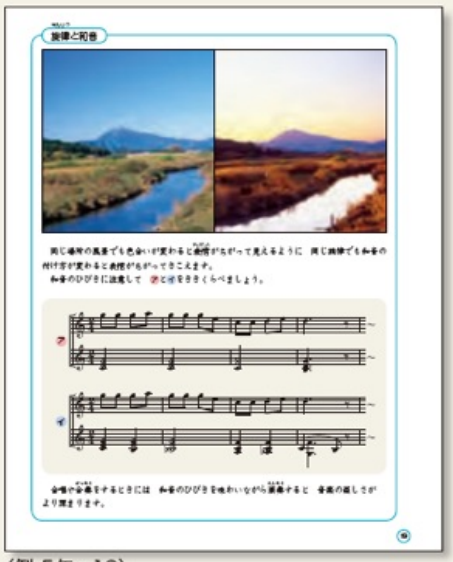
▼

表現や鑑賞の活動を通して、音楽学習を深めます。



(例 5年p.10・11)

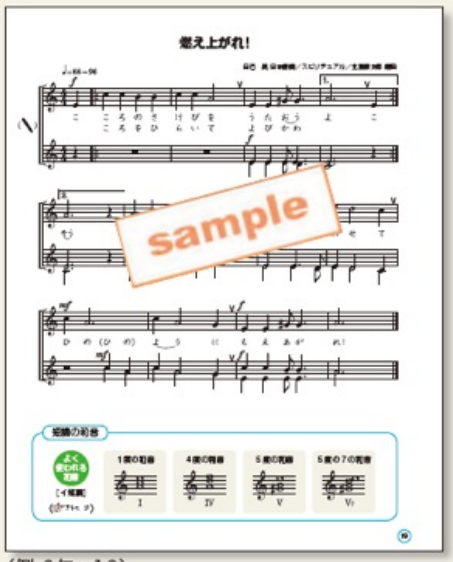
「旋律の重なり方」を学習し、表現の仕方を工夫します。



(例 5年p.19)

「旋律と和音」の関係を目と耳で探っていきます。

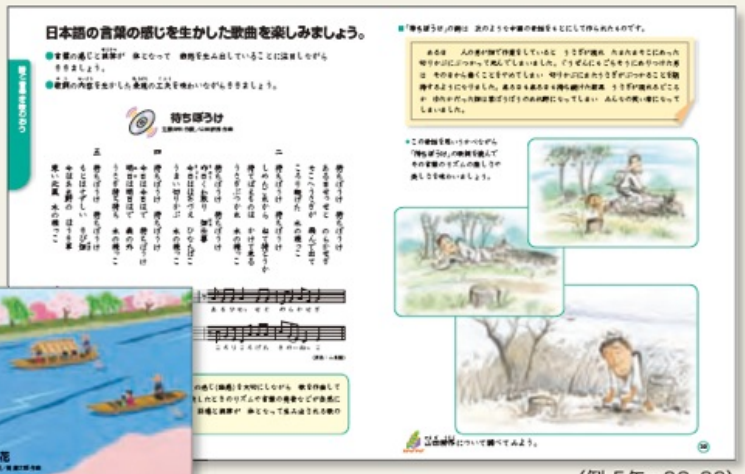
「短調の和音」を学習します。



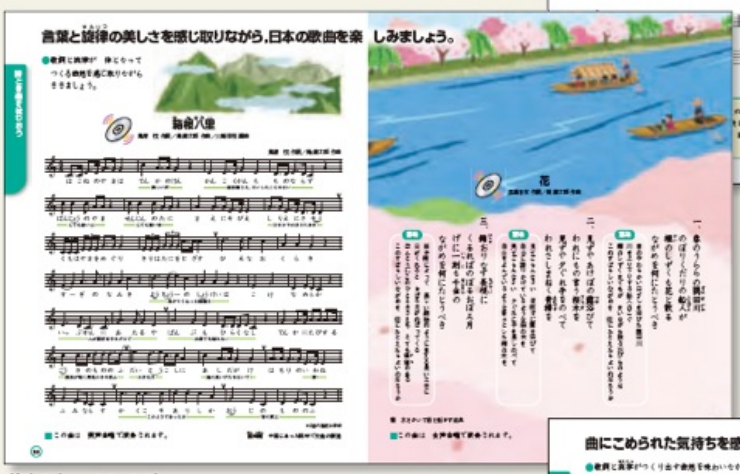
(例 6年p.19)

言葉と音楽

歌詞の背景が分かるような解説や、歌詞の難しいところに語意や大意を示し、理解の一助としています。



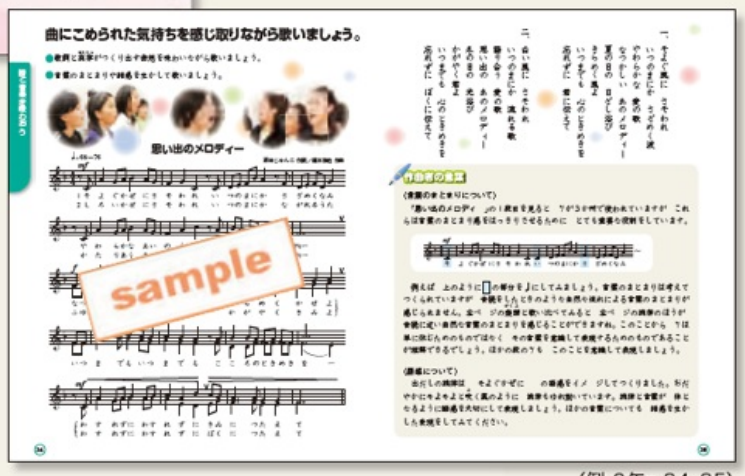
(例 5年p.32・33)



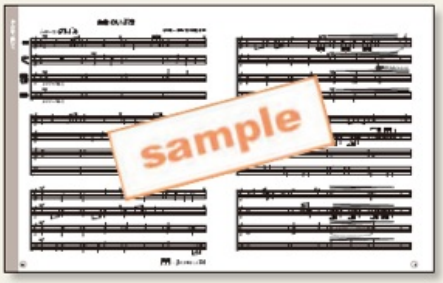
(例 6年p.32・33)

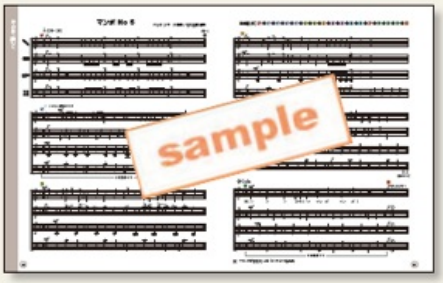
作曲者の言葉

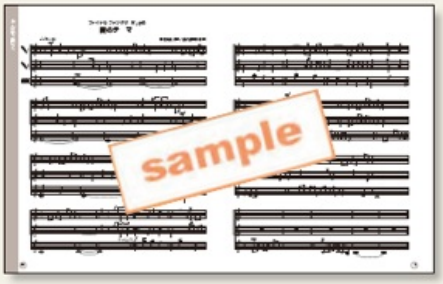
曲想を感じ取り、表現の仕方を工夫するための参考として、作曲者自身が「言葉のまとまり」や「語感」について伝えます。

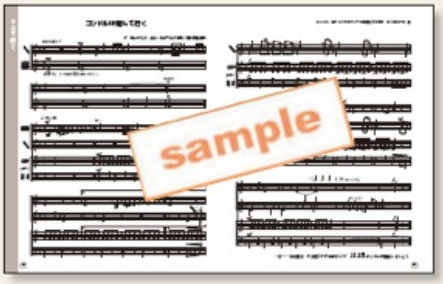


(例 6年p.34・35)









巻末の合奏曲

行事や音楽会などに適した器楽曲を豊富に取り上げています。

歌唱・器楽・音楽づくりの主な系統性

		低学年		
		1年	2年	3年
歌唱		斉唱		
		交互唱		
			輪唱	
				オスティナート唱
				バートナーソング
				二部合唱（チャレンジ!）
器楽	鍵盤楽器	指の体操		
		ドのポジションで5指		
			ポジション移動で5指	
				指くぐり、指またぎ
	リコーダー			シ ラ ソ ド̄ レ̄ ファ ミ レ ド
音楽づくり		［なまえあそび］p.10 ［ことばあそび］p.22 3文字や5文字の言葉を使ってリズムリレーをする。	［リズムあそび］p.28 リズムカードを組み合わせてリズム創作をする。	［リズムばんそうづくり］ 『ゆかいな木琴』p.38 『パフ』p.46
		［おとあそび］p.37 ［おとあそび］p.39 朗読に合わせて音づくりをする。	［音さがし］p.32 身の回りの楽器や物から好きな音を選んで、『かぼちゃ』の打楽器パートをつくる。	［音づくり］p.28 音の長さや音色の違いを聴き比べながら、「まほうをかける音」をつくる。
			［せんりつあそび］p.21 和音の構成音の中から音を選んで『ドレミであそぼ』の対旋律の一部をつくる。	［せんりつづくり］p.11 和音の構成音の中から音を選んで『海風きって』の対旋律の一部をつくる。
				［せんりつづくり］p.22 ラ·ド̄·レ̄の3音を使っておはやし風の旋律をつくる。
				［せんりつづくり］p.57 空いている小節を完成させる。

＊p.表記は教科書ページ

中学年	高学年	
4年	5年	6年

二部合唱

三部合唱

ミ ファ ソ

#ソ #ファ
p.7 p.21

♭シ #ド
p.10 p.11

[リズムばんそうづくり]
『冬の歌』p.36
『こきりこ』p.46

[リズム伴奏づくり]
『キリマンジャロ』p.28

[リズム伴奏づくり]
『ラバース コンチェルト』p.12

[リズムアンサンブル] p.27
やさしいリズムアンサンブルに自由なリズムを加える。

[リズムアンサンブル] p.27
やさしいリズムアンサンブルに自由なリズムを加える。

[リズムアンサンブル] p.41
各自がつくったリズムを組み合わせて、リズムアンサンブルをする。

[音づくり] p.26
音色の違いを生かして、『音のカーニバル』の打楽器パートをつくる。

[音楽づくり] p.45
『銀河鉄道の歌』から物語を想像して、それに合う音楽をつくる。

[せんりつづくり] p.9
和音の構成音の中から音を選んで『歌のにじ』の対旋律の一部をつくる。

[せんりつづくり] p.18
ミ・ソ・ラ・ド・レの5音を使っておはやし風の旋律をつくる。

[せんりつづくり] p.56
空いている小節を完成させる。

[旋律づくり] p.49
旋律の特徴に注目しながら、空いている小節を完成させる。

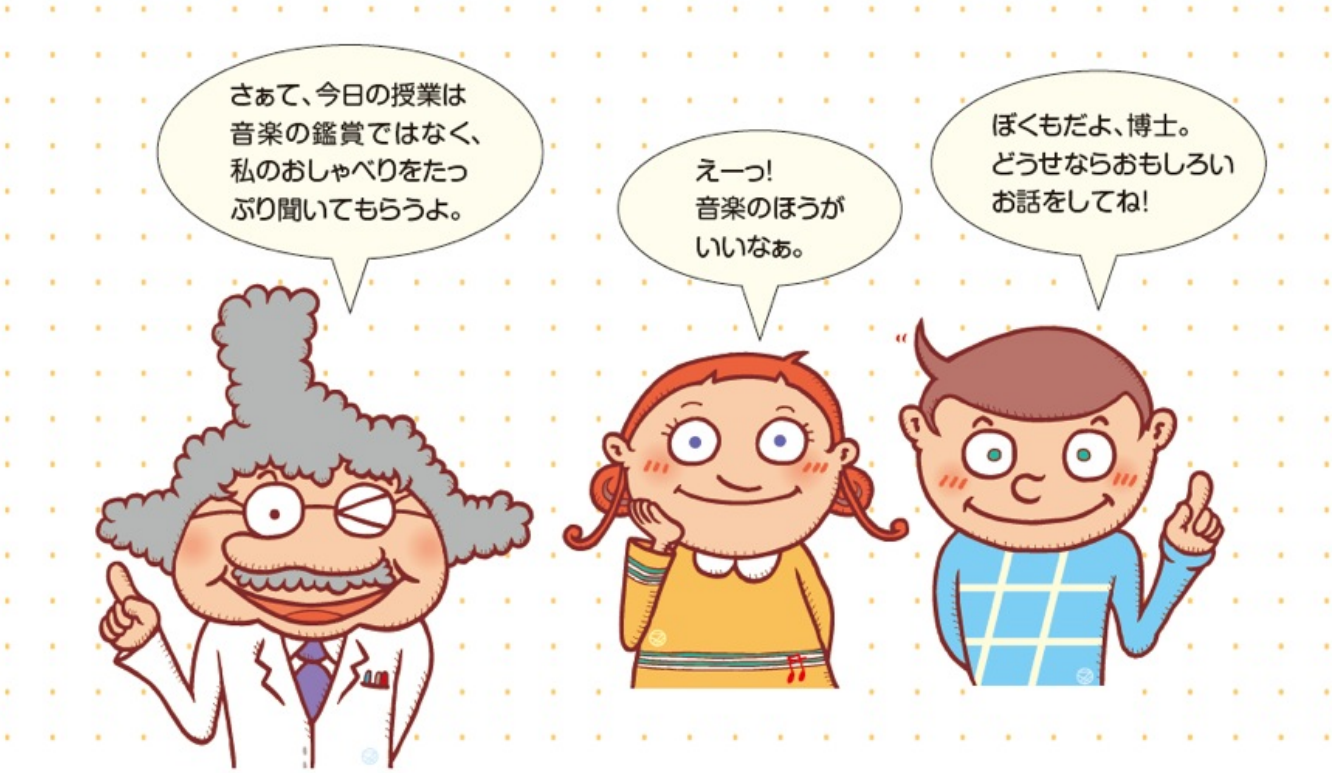
[旋律づくり] p.49
決められたリズムを使って、まとまりのある8小節の旋律をつくる。

資料室

ビート博士による

鑑賞曲 寄り道わき道ガイド

教科書に掲載されているたくさんの鑑賞曲。
「知っていると少しは役立つかも…?」といったスタンスで、
いくつかの作品や作曲者について情報をお伝えします。
案内役は、教材資料『みんなでリズムクラッピング』のビート博士。
新学期からの新しい教え子たちを相手に解説しますが、脱線ばかりしているようです。



1 いろんな楽器で演奏される曲ナンバーワン

『くまばちは とぶ』(1年)

リムスキー＝コルサコフはオーケストラの作曲技法に優れ、曲を書くだけでなく、『管弦楽法原理』『和声法要義』などといった理論書も執筆しています。教師としても活躍し、ストラヴィンスキーやプロコフィエフをはじめ、優秀な人材を多く育てました。『はげ山の一夜』(次ページ参照!)などで知られるムソルグスキーとは親しい友人であり、同じ部屋に住んで、1台のピアノを午前と午後で分け合って使い、作曲していたこともあったそうです。

『くまばちは とぶ』は、『皇帝サルタンの物語』というオペラの中で使われるオーケストラの曲ですが、旋律の速い動きは「演奏者の腕の見せどころ」というわけで、数多くの編曲版がつくられ、さまざまな楽器で演奏されてきました。

例えば、CDに収録されたものだけでも、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、ピアノ、トランペット、トロンボーン、コルネット、チューバ、フルート、オーボエ、クラリネット、リコーダー、マリンバ、それから民族楽器のバラライカや胡弓など、実に多くの楽器によって独奏されています。さらに、いくつかの楽器によるアンサンブルや吹奏楽、ジャズによる演奏もあります。実際の演奏会などで、これらの楽器や編成以外のものを耳にされたかたもいらっしゃるのではないでしょうか。

●リムスキー＝コルサコフ (1844-1908) ロシア

2 ペールの冒険譚
『山の魔王の宮殿にて』(4年)

グリーグは、現地ノルウェーでは「グリッグ」という発音になるそうです。国民的に人気のある作曲家であり、一時はノルウェー紙幣に肖像画が使用され、彼が亡くなったときには国葬規模で送られました。

この曲は、イプセンの書いた戯曲『ペール ギュント』の付随音楽としてつくられた作品で、主人公ペールは夢想家、ほら吹き、怖いもの知らずの冒険家。この性格はノルウェー人によくみられる一面であり、皮肉をこめてペールが描かれているとして、当時は原作への批判も起こりました。組曲『ペール ギュント』からは『朝の気分』なども教科書で紹介していますが、かつてはこの第1組曲の4曲すべてが、鑑賞共通教材として位置付けられていました。

●グリーグ（1843-1907）ノルウェー

3 日本のお寺にあるような鐘とは違います
『かね』(3年)

フランスの文豪ドーデの戯曲『アルルの女』の上演に当たり、ビゼーは27もの曲をつくりました。残念ながら劇は不評でしたが、初演後すぐにビゼーは自ら劇中音楽のうち4曲を選び、編成の大きな管弦楽用に編曲します（第1組曲）。これを演奏会で発表すると大好評。組曲としての人気は今日に至ります。なお、ビゼーの没後、彼の友人ギローも劇中音楽より他の4曲（うち1曲は別の歌劇からの編曲）を選び組曲としました。これが第2組曲で、『ファランドール』が含まれているのは、こちらのほうです。

『かね』のフランス語の原題は「Carillon（カリヨン）」といい、音高の異なる数個の鐘を組み合わせた、メロディーの演奏できる鐘を指します。

●ビゼー（1838-1875）フランス

4 夏至の夜にはなにかが起こる
『はげ山の一夜』(4年)

ヨーロッパでは昔から、「夏至の夜には不思議な出来事が起こる」といわれています。交響詩『はげ山の一夜』は、この夏至の夜を扱ったもので、同じく夏至の夜を取り上げた作品には、メンデルスゾーンの付随音楽『真夏の夜の夢』も挙げられます。同じ題材でも『真夏の夜の夢』が妖精のいたずら物語であるのに対し、『はげ山の一夜』で描かれるのは悪魔の饗宴…。ずいぶん違いがありますね。

現在、ムソルグスキーの『はげ山の一夜』として演奏されているものは、彼の死後、リムスキー＝コルサコフによって編曲されたものです。

●ムソルグスキー（1839-1881）ロシア

5 「作曲者の修正をお願いします。」
ペツォルトの『メヌエット』(2年)

ペツォルトの『メヌエット』といっても、パッと音楽が浮かぶかたはまだ多くないかもしれません。でも『ラバース コンチェルト』のもとになったあの曲といえば「あぁ、そうか」と思われる人も多いはず。そして、続いてこんな声が聞こえてきそうです。「『ラバース コンチェルト』の原曲の『メヌエット』は、バッハが作曲したのではなかったっけ？」

音楽の父と呼ばれるJ.S.バッハが2番目の妻アンナ マクダレーナに贈った曲集中の作品であることから、この曲は長い間バッハの作品と思われていました。しかし作品研究が進むにつれて、「バッハの作風と異なる」といった意見が出始め、1979年の『バッハ年鑑』に掲載されたH.J.シュルツェの論文により、この作品はペツォルトの書いたクラヴィーア組曲ト長調の一つであると論証されたのです。

この作品以外にも、バッハの偽作論議はありました。しかしそれは、彼が他者の作品を自分用に書き写したものなどが、後世の人々によってバッハの作品だと勘違いされたからであり、作曲家の故意によるものではないと考えられています。

実際の作曲者であるペツォルトは、バッハより8歳年上の人物。教会音楽の作曲家として活躍し、オルガニストでもあった彼は、バッハとも親交があったようです。バッハの長男ヴィルヘルム フリーデマンは、ペツォルトの死後、後任として聖ゾフィー教会のオルガニストに任用されました。

●ペツォルト (1677-1733) ドイツ

6 女王様は花火がお好き
『歓喜』(6年)

音楽を聴きながら花火が打ち上げられる――。ロックコンサートならいざ知らず、オーケストラなどクラシックのジャンルでもそんなことが行われるのでしょうか？
――答えはイエスです。

ヘンデルは、8年間続いたオーストリア継承戦争の講和条約締結を祝う花火大会のために組曲『王宮の花火の音楽』を作曲しました。

祝典会場となったのはロンドン市内のグリーンパーク。当日は、会場が野外ということもあって、100人の管楽器奏者を従えていましたが、組曲の演奏は花火の最中ではなく打ち上げ前に行われたので、厳密に言えば冒頭の「音楽を聴きながら花火が打ち上げられる」は、ヘンデルの時代にはまだノーではあります。

花火大会の演出にはイタリアからの花火師たちも加わり、色鮮やかなお城が花火の明かりによって浮かび上がるしかけになっていました。ところが、肝心の花火はうまくいかず、打ち上がってもお粗末の連続…。大観衆であふれかえった会場の裏側では、イタリアとイギリスの花火師たちがけんかを始め、とうとう暴発した花火によってパビリオンが焼け落ちてしまうという、目も当てられない悲惨な結末になってしまったのです。

イギリスで花火大会が行われるようになったのは、1572年にエリザベス1世が花火の打ち上げを見て喜ばれたという理由から。2002年に行われたエリザベス女王(2世)の即位50周年記念音楽会では、バッキンガム宮殿広場で、大量の打ち上げ花火とともに『王宮の花火の音楽』が演奏されました。野外会場には巨大なスピーカーが備え付けられ、花火の爆音に消されることなく、大勢の人々が同時に音楽も楽しむことができたのです。

●ヘンデル (1685-1759) ドイツ→イギリス

本紙p.35に器楽合奏の楽譜があります。

7 美しい『白鳥』の秘密

『白鳥』(4年)

どこまでも美しいメロディーの『白鳥』。もとはチェロと２台のピアノによる作品で、組曲『動物の謝肉祭』に収録されているサン＝サーンスの名曲です。動物と関連させた作品といえば、『ピーターと狼』（プロコフィエフ）、『小犬のワルツ』（ショパン）、『おどる こねこ』（アンダソン）などいろいろありますが、中でも『動物の謝肉祭』は、まさに音楽による動物園といった印象を受けます。

ところが、サン＝サーンスは音楽による動物描写に加え、当時のフランス音楽界にうごめく人々を「動物」に見立て、ユーモアたっぷりに皮肉ってこの作品をつくりました。その表れとして、いくつかの曲に他の作曲家の作品がパロディーとして顔を出します。オッフェンバックの『天国と地獄』、ベルリオーズの『ファウストの劫罰』、ロッシーニの『セビリアの理髪師』など…。ほんとうに個人的な冗談のつもりだったのでしょうか？　サン＝サーンスは彼が生きている間、組曲の楽譜出版を決して許可しませんでした。

ただし１つだけ例外があります。この『白鳥』に限り、生前に出版しているのです。そこで、なぜこの曲だけなのか仮説を立ててみました。①ただ単に自信作だった。②友人のチェリストに頼まれた。③作曲した背景には、実は白鳥のように美しいモデルがいて、その人に贈りたかった――。

ちなみに、シンガーソングライターのさだまさしは、『セロ弾きのゴーシュ』という曲の中で、『白鳥』のメロディーを取り入れています。

●サン＝サーンス（1835-1921）フランス

8 語学の達人・アンダソン

『シンコペーテッド クロック』『おどる こねこ』(1年)『トランペットふきの休日』(3年)

『シンコペーテッド クロック』『おどる こねこ』(１年)『トランペットふきの休日』（３年）などを作曲したアンダソンには、音楽以外にも得意なものがありました。

スウェーデン移民の両親のもとアメリカで生まれたアンダソンは、英語とスウェーデン語を子どもの頃に習得。名門ハーヴァード大学で音楽を学び修士号を取得しますが、その後は言語学の研究員として活躍しました。彼はデンマーク語、ノルウェー語、アイスランド語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語をマスターしていたほどの語学力のもち主だったのです。

言語学者としての研究に終止符を打ち、音楽家としてスタートを切るきっかけとなったのは、ボストン交響楽団のアーサー フィードラーによってその才能を認められたことが大きかったと思われます。クラシック音楽にジャズやポップスを加えたような雰囲気が特徴的なアンダソンの曲は、そのほとんどがフィードラーの指揮するボストン ポップス オーケストラによって紹介されました。

彼の作品は、大統領がホワイトハウスにおいて他国の政府高官をもてなす際などによく演奏されるほか、『シンコペーテッド クロック』はTV番組のテーマ曲として、『おどる こねこ』はファミリーコンサートの人気曲としてよく耳にするなど、とにかく親しみやすさが特徴。『トランペットふきの休日』は運動会でおなじみですが、アメリカの小学校では日本のような運動会は行われていないので、我が国に限られたBGMなのかもしれません。

また、アンダソン自身が指揮をした音源も聴くことができますが、現在演奏されるテンポよりもおおむね速いようです。

●アンダソン（1908-1975）アメリカ

心に残る音楽授業

小学校時代に習った曲の思い出

子どもの音楽に対する「思いや意図」を大事にすること――。
たとえ他の人にうまく伝えられなくても、子どもたちは自分なりに音楽を受け止めているはずです。
そんなことから、実際に「子どもの頃、音楽をどう受け止めたのか?」ということを知りたいと思い、
作曲家の方々にお聞きしてみました。
記憶に残る作品や活動は、どのように語られるのでしょうか…。

Q1 ―― 小学生のときの音楽の授業で、最も印象に残っている作品（活動）はなんですか？

Q2 ―― その理由（そのときに感じた気持ちなど）を教えてください。

石桁冬樹

A1 『スケーターズ ワルツ』の合奏

A2 5年で木琴のパートを演奏したとき、先生の指揮に合わせて、速さや強弱を変化させる喜びを知った曲です。ピアノ伴奏ばかりやっていたので、他の楽器を担当させてもらったことも記憶に残っている理由かもしれません。

上柴はじめ

A1 どこかで春が

A2 担任の先生が突然亡くなられ、臨時で教頭先生が音楽の授業を受け持ったことがありました。教頭先生が弾くオルガンに合わせて『どこかで春が』をみんなで歌ったのですが、「どこかで春が　生まれーてるー」の「るー」の部分で、本来は和音がドミナント（属和音）に変わるのに、トニック（主和音）のままだったのです。それが気持ち悪くて、思わず先生のそばに行って、

「先生、そこは伴奏の音が変わらないとあかんのんちゃいますか？」

（大阪の小学校でしたから大阪弁です。）

なんて生意気なことを言ってしまったのです…。私は正式にピアノを習っていたわけではありませんが、和音にはかなり敏感だったようです。そしてそれがプロの音楽家として活動している現在にも影響しているのだろうと思います。

（童謡のことをもう少し…）

本題から離れますが、子どもの頃は童謡が好きでした。例えば、夕日を見たら「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む～」、薄暗くなると「あの町この町日が暮れる～」、暗くなれば「森の木陰でドンジャラホイ～」と口ずさむなど、実生活と密着していたんです。童謡が生活の中に溶け込んでいましたね。

大熊崇子

A1 組曲『くるみ割り人形』（鑑賞）

A2 感想文を書く課題が与えられました。具体的にどんなことを書いたのかは思い出せないのですが、言葉で表現する作業は大変だったと記憶しています。教科書のバレエの写真を見て（当時はDVDがなかったので）、音楽を聴き、一生懸命なにかその音楽を捉えよう、感じようとしていたのでしょうね…。おかげで全曲、今でも覚えています！

かつては組曲全体が共通教材でした。
（昭和40年代の教科書より）

荻久保和明

A1 音痴で歌うことが苦手だったので、思い出に残る曲は特にありませんが…

A2 ただピアノを少々弾いていたので、鼓笛隊の練習で“ベル リラ”という楽器を女の子に交じって演奏したのはうれしかった思い出です。あと、『ペール ギュント』を聴いて「オーケストラというのはすごいな」と思ったことを覚えています。とにかく僕はシャイで目立たない、地味な少年だったのです。

できれば身も震えるような感動を授業中に味わいたかったなぁ。

ベル リラ

加賀清孝

A1 いずみのほとり

A2 先生は東北の出身で、歌詞がなまっていたのがとても印象的でした。「水よ　水よ～」を「みんずよ～みんずよ～」と模唱してくれました。授業中はまねしませんでしたが、学校の帰り道、友達とよく「みんずよ～」と歌ったものです。実に愛すべき先生でした。器楽アンサンブルも放課後に指導してくださっていました。熱心でしたね。楽しかった記憶があります。

＊『いずみのほとり』（作詞 深尾須磨子／作曲 橋本国彦）：楽譜を探したところ、昭和32年に発行された『NHK学校放送 小学校楽譜集』（日本放送出版協会刊）の高学年用第二集に収録されていました。

黒澤吉徳

A1 花のまわりで

A2 最初に合唱を学習した曲。合いの手の部分が気持ちよく、合唱の楽しさを感じた。気持ちをこめて元気はつらつと歌った記憶が残っています。

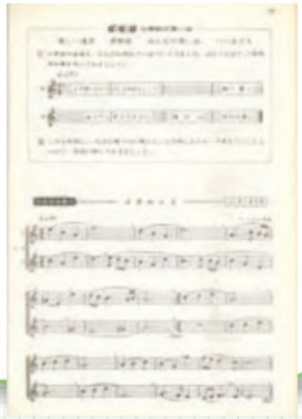
＊『花のまわりで』（作詞 江間章子／作曲 大津三郎）：岡本敏明と山本直純による編曲版があり、伴奏が異なります。昭和30年の第22回NHK全国学校音楽コンクール小学生の部では、岡本敏明による編曲版が使用されました。

鹿谷美緒子

A1 クリーゲルの「メヌエット」（現行表記:クリーガー）

A2 出合ったのは小学校４～５年のとき。所属していたリコーダークラブで演奏した記憶があります。とても美しい旋律だなぁと思い、いい音色で、上手に演奏をしたくて、一生懸命練習した覚えがあります。

「二重奏」というのも魅力的でした。ちょうど、合奏することの楽しさを感じ始めていた頃だったと思います。短調の曲が好きになっていくきっかけにもなりました。

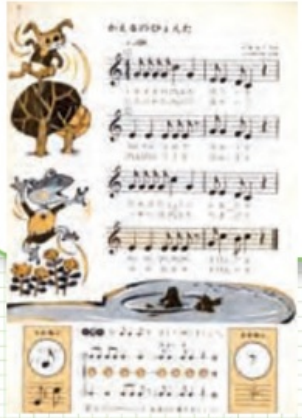


現在のものとはアレンジが違います。
（昭和40年代の教科書より）

杉本竜一

A1 「この1曲が人生を変えた」というような曲はありませんが…。

A2 唱歌には、永い年月を経ても色褪せることのない、すばらしい宝石のような名曲が多く、どれもが印象に残っています。それから5年と6年のときに参加した「鼓笛隊」の活動も楽しい思い出です。大太鼓を担当していましたが、行進のときにはおなかにズンズン響いたものです。合奏の楽しみを初めて体験したのはこのときです。指導していただいた教頭先生はおおらかで、いつも笑顔を絶やさないすばらしいかたでした。



長い期間掲載されていた教材です。
（昭和40年代の教科書より）

富澤　裕

A1 あえて言えば『もみじ』です。

A2 「あえて」というのは、私の中に音楽の授業に関する記憶がまったくといっていいほど残っていないためです。通っていた小学校では「歌なんて女の子がやるもの」という空気があり、運動嫌いで読書好きなことから「女の子みたい」といじめられていた私は、さらにいじめられるのが嫌で歌わなかったのかもしれません。『もみじ』は「歌った」という記憶の残っているわずか２曲のうちの1曲です。

そのような状況ですから、「歌った」という記憶以外はなにもないのです。音楽的に寂しい小学生時代だったにもかかわらず、今音楽を職業としていることには自分でも驚きます。

いじめから逃れるために、本当は好きだったはずの音楽をやらずにいたことが、後になって「音楽をやりたい」という思いに自分を駆り立てたのかもしれません。

橋本祥路

A1 われは海の子

A2 音楽専任の先生がお休みの日、クラス担任の先生が授業を代行することになりました。先生は、「今日は先生のいちばん好きな曲を教えます」と『われは海の子』の歌詞を黒板に板書し、歌詞について、「我」は「僕」とは違う、というところから一語一句思い入れたっぷりに教えてくれました。先生の思いを受けて、曲のイメージもとても広がりました。先生はオルガンを弾けなかったので、ア カペラで斉唱することになりましたが、ふだんは小さな声しか出さないみんなが大きな声で歌い、「歌ってすごい！」という気持ちになりました。技術的なことも大切ですが、歌う場合には、エネルギーや心が必要だと感じる原体験だったと思います。

長谷部匡俊

A1 かえるのぴょんた

A2 シンコペーションを多用した歌のリズムがおもしろくて、何度歌っても飽きなかった曲です。家で毎日歌っていたら、近所のおばさんから「お歌、上手ね」とほめられて、ますますこの歌が好きになりました。

横山潤子

A1 『花』『流浪の民』

A2 まず、曲そのものというより、ひととおり鑑賞したか歌ったかしたあとでの先生（専科でした）のお話が印象に残っている『花』について。

「この時代の作曲家で、滝 廉太郎だけが特別に才能のある作曲家だったわけではなく、ほかにも優れた作曲家はいたんですよ。でも、この時代にしてこの音づかい、という点で、滝廉太郎ひとりがこのように注目されているんです」というような説明がありました。その見解の真偽については、今でも…まぁどっちでも…って感じなのですが、当時の私はとにかく「ふう～ん。世の中って、そういうことか！」と。音楽の学習というより、社会勉強？

『流浪の民』は、学習発表会かなにかで披露するために授業時間を割いて練習したものです。先生的には、ソロのとれる子もたまたま何人かいるし、ちょっと難しめだけどやってみようか…みたいなノリだった？ように記憶しています（違ったかな…ちなみに私はピアノを弾かされてました）。もちろん日本語歌詞ですよ。でも、ちょっと格調高いその日本語歌詞の雰囲気、見知らぬ土地や時代の見知らぬ景物、自分たちの暮らしとはまったく異なる生活や風土が展開しているその世界！

純粋に描写的であるというには、シューマンの音は自分のイメージとはやや隔たりがあるように思えたので、そこはきっと、聴いたり演奏したりするのに“なにか努力が要る”ものなんだな、とは思いつつも、頭の中で繰り広げられていた総天然色の想像の国は、いまだに色褪せないでいます。